

# 実践報告 美術による東松島（宮戸）復興プロジェクト・チルドレン

宮崎敏明

## Project report: The Higashi-Matsushima (Miyato) Reconstruction through Art Project/Children

Toshiaki MIYAZAKI

### 1. はじめに

宮戸小学校は宮城県東松島市の南西に位置する、宮戸島のほぼ中央に位置する高台にある、島に一つだけある公立学校として知られている。日本三景・松島観光のスポットである「奥松島」として、民宿経営や海苔生産を生業としている島民が多かった。

島唯一の松ヶ島橋により本土と接続していたが、平成23年3月11日の東日本大震災で橋が崩落し、電気や水道などのライフラインも停止して孤立状態となった。人口は震災前約970人ほどだったが、震災後の現在（2013年10月）は400人台と激減してしまった。

東日本大震災発生に伴う津波の高さは10mを超えて、島に押し寄せた。高台にある本校の校門近くまで迫った。島民の9割以上約900人が宮戸小に避難し、教室や体育館が避難所として活用された。宮戸島の4分の3の浜と家屋が津波で流され破壊された。しかし宮戸小の児童は、奇跡的に全員が無事だった。

現在、宮戸小は校庭に仮設住宅もあり、体育の授業や休み時間などにおける児童の活動範囲が制限されている。震災に伴う彼らの住環境や通学路の大きな変化等は、心身へのストレスを生み出す要因となっている。

### 2. 宮戸復興プロジェクトCの始動（主題設定の理由と指導方針）

保護者や教師は児童に対する心のケアを継続的に



（図1）東松島の位置



（図2）宮戸島の位置

行い、児童も目の前の現状を精一杯受け止めて、毎日を送っていた。しかしながら身体や心のストレスは、避難所や学校での生活において様々な形で現れていた。

先の見えない不安に大人は憔悴しきっていた。大人たちがかける子どもたちへの優しい言葉にも説得力がなかった。そのような状況に突然追い込まれ、不安や恐怖、悲しさなどを十分に受け止めてもらえない子どもたちは、やり場のない感情を周りにぶつけるしかなかった。高齢者が所狭しと歩く避難所の周りを自転車で暴走したり、低学年の児童に対して訳もなく足蹴りをしたりした。保護者や教師は普段の宮戸小児童の生活ぶりからは信じられないような、光景を目にしたのである。純朴で優しく、学年の分け隔てなく仲良く過ごす宮戸島の子どもたちでは、あり得ない姿であった。



(図3) H23、3/12震災直後の避難所の様子



(図4) 専門性を生かして指導をしている様子

教師の中には、家族を失い家屋を流された者もいたが、避難所対応や学校再開の準備などに追われていた。ついには過労で緊急搬送される教員も出てしまった。この状況を何とかしなければならない。

生き残った私は、教師としてまた人間として、今この宮戸島で何ができるのだろうかと自問した。5月を迎えた。私にできることは、「学生時代から学び続けている図画工作や美術の教育である」、そう思った。そこで「子どもたちが夢と希望をもって学校生活を送るために、10年後の宮戸島を図工で表現させたい」と職員に呼びかけ、校長の指導の下、「宮戸復興プロジェクトC (チルドレン)」を始動させた。

プロジェクトCの指導方針は次の3点とした。

- ①明日の宮戸に向けて、夢をもってのびのびと表現する。
- ②子ども一人一人の希望につながる思いを大切に
- ③家族、地域の人に自分の夢と希望(思い)が伝わるものにする。

活動がスタートした。朝の授業前活動での学習タイムや図画工作科の授業時間、総合的な学習の時間等を多角的に活用しながら、教師の専門性を生かした交換授業を取り入れ、全担任で指導を行う体制を採った。

### 3. 宮戸復興プロジェクトCの活動計画

震災の影響でやむなく文化的行事や、地域の活動が制限されてしまった。疲弊した学習環境下にあるものの、総合的な学習の時間や生活科の指導時間等も生かして、指導に際しては以下のとおりとした。図画工作科という教科に震災を乗り越える価値(力)があると信じて、1年間の活動計画を立てた。

実践報告 美術による東松島（宮戸）復興プロジェクト・チルドレン 5

|       | 図工や総合、生活科と関連させた活動内容  | 児童が表現したことを伝えたい人   | 伝えることで期待する児童の思いの例  |
|-------|--|---|--|
| 第1期活動 | <ul style="list-style-type: none"> <li>7/16の参観日までに画用紙に描き、保護者に見ていただく。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>家族に見せて自分の夢や希望を伝える。</li> </ul>  | <p>「家族が笑顔になる、元気になる」</p>                                  |
| 第2期活動 | <ul style="list-style-type: none"> <li>10/29の宮戸小復興祭までに、子どもたちの思いを醸成する「親子創作活動」を行う。</li> <li>児童が描いた絵とその思いを親子でTシャツにする。(東京のデザイナーグループによる支援の趣旨と合致したコラボレーション活動)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>親子で表現し合い、喜びを分かち合う。</li> <li>自分の絵が描かれたTシャツや、親子でつくった創作物を着ることで、夢や希望を保護者にしっかり伝える。</li> </ul> | <p>「親子で作ったTシャツを着て、自分も家族も、もっと元気になる」</p>                   |
| 第3期活動 | <ul style="list-style-type: none"> <li>3月までに全員の絵を一つにまとめる(ベニヤ板4枚分の大きさに描く)。</li> <li>児童がつくるオリジナルの木枠を絵に付けて体育館に飾る。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>地域の人に自分たちの夢や希望を伝える。</li> <li>自分たちの夢や希望をみんながいつでも確認できるようにする。</li> </ul>                    | <p>「宮戸の人が笑顔になる、元気になる」</p> <p>「毎日の学校生活を頑張ろうとする、自分になる」</p> |

(表1) 年間の活動計画と期待する児童の思いの設定

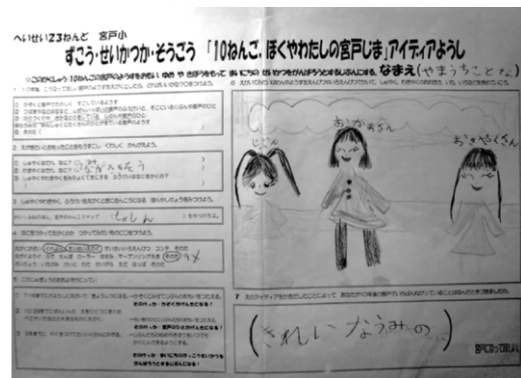
1. 実践の概要

(1) 児童の自主性を生かし、自ら表現を追求する指導の工夫 (第1期活動)

第1期における画用紙に描く活動では、「10年後の宮戸島の様子を思い、夢や希望をもって毎日の生活を頑張ろうとする自分になる」というねらいを、全校学習タイムを使って児童間で確かめ合った。

構想の段階で児童は、自分の夢や希望を表現することに適している、画材を自ら選び出した。これまでに学んできた表現技法を自分なりに選択して描いていた。

児童の活動中における様子を見たところ、これまで以上に意欲的に活動を続け、休み時間になっても描き続けている児童もいた。それは自分自身で画材や、表現技法を主体的に選んで、活動しているからと思われる。「釣りができる宮戸になってほしい」「きれいな海の宮戸になってほしい」など、アイデ



(図5) 児童の夢や希望が書かれた構想カード

アイデア・カードに書き込まれたが、その言葉は児童の心の底から湧き出した強い願いである。そう感じ取ることができた。(1)

(2) 第1期活動の成果

第1期の活動では、7月16日から始まる夏季休業



(図6) 休み時間になっても描き続けている様子



(図8) 子の思いを受け止めて活動している様子



(図7) 児童が描いた絵の一部

中の校内展示期間中に、保護者や地域住民、一般の方々108名の参観があった。<sup>(2)</sup>アンケートに回答を寄せた33名で最も多い感想は、「子どもたちの絵から元気をもらった」「一人一人の個性が出てよかった」(共に70%の回答)であった。

これらの回答から、宮戸復興プロジェクトCの第1期活動の「家族が笑顔になる、元気になる」というねらいは、概ね達成できたと見なすことができる。

第2期では、親が感じた温かい思いを生かし、親子による造形活動を行うことによって、子どもたちを一層、夢と希望に向かって歩み出させたい、と願った。いよいよ第2期の活動がスタートした。

### (3) 児童の思いを醸成する「親子による創作活動」(第2期活動)

第2期の活動の始まりは親子による創作活動であった。子どもたちは親に賞賛され、自分の思いを受け止めてもらっていると感じたとき、一層の安心感

をもって毎日の生活を送ることができる。親子による創作活動は、10年後の宮戸に対する児童の思いを醸成する原動力となる。それは子どもたちの背中を押しだし、自主性を育むことにつながると考えた。

親子による創作活動では、子どもたちの思いを創作文字で表す活動を行った。以下はその指導展開の概略である。

#### 1) ねらい

- ・10年後の宮戸島に夢や希望を抱いた子どもとともに、親がその思いを互いに感じ取ることができるようにし、それを文字で表す。
- ・創作活動を通して親子のふれ合いを深める。

#### 2) 参加人数 児童29名 保護者21名 担任等11名 計61名

#### 3) 親子創作活動の内容 \*図9～16は保護者に見せたプレゼン画像

題材名「10年後の宮戸島に対する思いを創作文字で表そう」(時数 図工1)

##### A 親子による絵の鑑賞と、今日の創作のねらいや内容について確認(15分)

- ・子どもの絵と願いが書かれた文を見ながら、我が子の願いを親が受け止める。
- ・子どもの願いに合った、色や模様を親子で考えて描く。
- ・子どもの思いを毛筆の文字で表す。
- ・完成した文字や絵は東京に搬送し、Tシャツになることを知る。

##### B 親子による創作活動(45分)

- ①新聞紙の上に毛筆用紙を置く。

## 実践報告 美術による東松島（宮戸）復興プロジェクト・チルドレン 7

\*繰り返しのリズムが現れる模様ができることに気付かせ、紙を折る。

②子どもの願いにあった模様をサインペンで楽しみながら描く。

\*にじみを予想して模様の間隔は広くしたり、狭くしたりする。

\*文字を書く部分に、模様があるよさや無いよさがあることを、気付かせながら試させる（中学年以上。低学年は行為そのものを楽しませる）。

③サインペンで描いた部分を水でにじませ、模様を完成させる。

\*水をかけた後、手でペタペタ紙を押すなどして、にじみ作りを楽しむ。

\*紙が破けないようにそっと開き、新聞紙の上で乾かす。

\*棟方志功などの作品をイメージ作りの参考にする。

\*時間内でどんどん試して楽しむ。

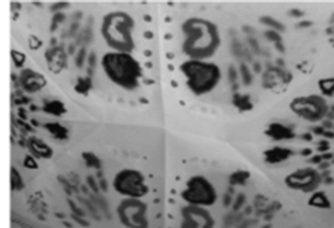
④子どもの願いを毛筆で書く。完成

\*相田みつをなどの創作文字を参考に示し、イメージしやすいようにする。

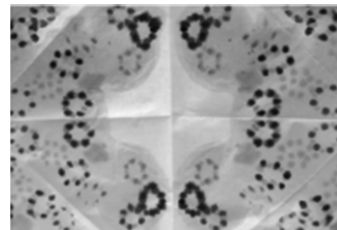
#### C 互いの鑑賞（10分）

4) 指導体制 T1：宮崎（全体指導）

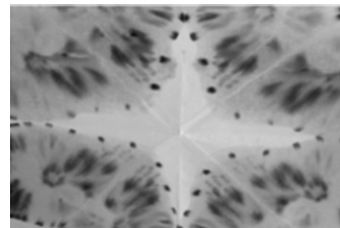
T2：縦割り班担当毎に、親子活動の補助



(図10)



(図11)



(図12)



(図9)



(図13)



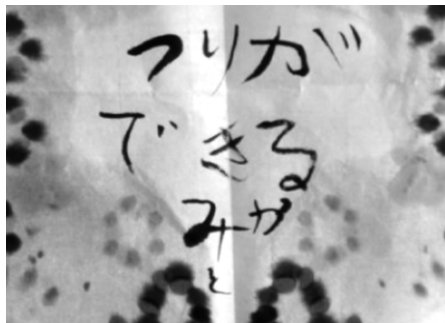
(図14)



(図17) 親子で制作した創作文字の一例



(図15)



(図16)

#### (4) 第2期活動での成果

10月29日に開催した、文化的行事「宮戸小の秋祭り」で創作文字を親子でつくったが、それをプリントしたTシャツの披露が第2期活動の終着点となった。東京のデザイナーグループとのコラボによってできたTシャツを着ながら、全校合唱や親子が触れ合う児童会主催による、お祭り等を実施した。支援

物資の服しか着ていなかった子どもたちにとって、Tシャツは自分の思いを込めて家族と共に作ったかけがえのない、世界に一つだけの服となった。このことが第3期の活動「全校児童による壁画づくり」の原動力につながるようにしたいと願った。

#### (5) 児童の思いを「一つの壁画に児童自ら、まとめていく創作活動」(第3期活動)

第3期の活動のねらいは、元気になった自分や家族の枠を超え、「宮戸地区の人が笑顔になる・元気になる」ことに据えられた。子どもたちが自主的に表現活動に取り組めるように、指導内容の工夫をすることが必要と考えた。そこで、授業前活動を生かしながら、以下のような計画で活動を進めることとした。



(図18) コラボTシャツを着た合唱の様子

## 実践報告 美術による東松島（宮戸）復興プロジェクト・チルドレン 9

| 活動日                                  | 主な活動内容  | 指導上の留意点   |
|--------------------------------------|---|---|
| 授業前活動<br>9/13（火）<br>16（金）<br>*15分×2回 | <ul style="list-style-type: none"> <li>一人一人の絵を基に、「海」「森」「人」など似通ったテーマ毎に、グループを作る。</li> <li>グループ毎に自分たちの絵を一つに表したらどうなるか。模造紙に下がきをする。</li> <li>下がきを発表し合い、各グループの思いや考えを感じ取る。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>教員は似通ったテーマ毎に、担当者として助言や指導をする。</li> <li>異学年によるグループの中で話し合いをさせ、まとめ役となるリーダーを決めさせる。</li> </ul>                         |
| 授業前活動<br>9/20（火）<br>27（火）<br>*15分×2回 | <ul style="list-style-type: none"> <li>グループでまとめた模造紙の下がきを持ちより、それぞれのテーマを一つに表したらどうなるか。グループ毎に模造紙に下がきをする。</li> <li>描いた下がきを他のグループに発表し、お互いのよさを見つけ、最終的に一枚の下がきにする。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>教員は、グループのメンバーの意見をうまく調整し、リーダーが下がきをしやすいよう支援する。</li> <li>リーダーの中から、話し合いでリーダーのまとめ役を選出させ、最終的な下がきを構成させる。</li> </ul>     |
| 文化的行事<br>9/28（水）<br>*2・3校時           | <ul style="list-style-type: none"> <li>全員で一つにまとめた絵を基に、ベニヤ板に下がきをする。</li> <li>ベニヤ板4枚分となることから、4つのグループをつくって、製作を進める。</li> <li>下がきの終わった部分から、水彩絵の具で描く。</li> </ul> <p>*全学年による共同製作という活動であるため、児童一人一人の明度や彩度の違いが、後の表現でのつまずきにならないようにする。そのためある程度、明度や彩度を合わせて取り組ませることにする。</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>教員は下がきのできたところから、水彩絵の具で児童に色を塗らせる。</li> <li>教員は児童の水加減や明度が、一緒に製作している仲間と似ているかどうか、を考えさせながら描くよう支援する（中学年以上）。</li> </ul> |
| 授業前<br>9/30（金）<br>*15分               | <ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれのベニヤ板毎に描いている色を見合い、色の調子を整えたり、描きながら新たな発想をして、友達と折り合いを付けながら描き加える。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>教師は児童の気付きを賞賛する。加えて短時間で色の調子が整うよう、水や絵の具の配合について助言する。</li> </ul>   |
| 文化的行事<br>10/11（火）<br>*2・3校時          | <ul style="list-style-type: none"> <li>4枚のベニヤ板を合わせ、壁画全体を見ながら、最後の仕上げをする。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>教師は児童の新たな発想や気付きを賞賛する。</li> <li>児童の10年後の宮戸への夢や希望につなげた、賞賛を忘れてはいけない。</li> </ul>                                     |

(表2) 第2期の活動計画と指導上の留意点等



(図19) 似た思いのグループ毎に発表している様子



(図20) グループ毎の構図のよさを見付けている様子



(図21) ベニヤ板に描いている様子

#### (6) 壁画作りにおける児童の葛藤と成長

第3期活動の活動である壁画づくりの最中に問題が生じた。5年生の児童Sが、描く魚にどうしても鋭い牙を付けたいと言い出し、鉛筆で下書きを始めたのである。それでは児童全員で話し合った「夢や希望に向かった明るい様子の壁画」とは異なる、雰囲気醸し出すことになってしまった。児童の話し合いで選ばれた数人のリーダーたちも、どのように対応したらよいか困惑してしまっ

た。こだわりをもつ児童Sの思いを集団の意向で本人が納得できないまま、無理矢理封じ込めるようなことはしてはいけない。筆者が教師である立場からこ

うも考えた。そこで震災復興に伴う、集団移転の話を取り上げた。大人たちの住み慣れた土地への思いは深い。しかし現状を受け止め、折り合いをつけて高台へ移転したり、遠く離れた場所へ移り住んだり、私たちはとにかく前へ踏み出さなければならぬ。こう語ったものの、児童Sにはやや難しい話に聞こえた。

その後、児童Sはしばらく描くことをせず、周りの児童がベニヤ板に描いている様子を見たり、鉛筆や筆を小刻みに動かして、ベニヤ板を叩いたりしていた。やがて魚の鱗をカラフルに描く、友達の作品を見つけた。そして、そのようなカラフルな鱗の魚を描きたい、と言い出した。

その言葉を聞き、教師よりもうれしい笑みを見せたのは、他ならぬ同じグループの児童たちであった。葛藤していたのは児童Sだけではなかったのである。

児童一人一人の絵が一つの壁画になっていくことで、全校児童29人の心も一つになっていく様子を感じ取ることができた。それは、「未来に向かって頑張ろうという気持ちになった」「宮戸小全員の気持ちが一つにまとまった」などといった、活動後における感想にも表れた。児童Sの感想は「みんなの心が一つになってうまくできたのでよかった」であった。この言葉は、校長をはじめとする教師の復興教育への思いを、一層奮い立たせることにつながった。

#### 5. 第1～3期活動の成果

本実践は現在も進行中のプロジェクトであるが、第3期までの活動を通じた児童の心の状態についてまとめたものが以下である。

- (1) 1学期に描いた「10年後の宮戸島」についての描いているときの感想 (一つ選択)  
 夢中になった (29名)  
 夢中にならなかった (無)

- (2) 1学期に描いた「10年後の宮戸島」につい



## 実践報告 美術による東松島（宮戸）復興プロジェクト・チルドレン 11

での完成したときの感想（複数選択）

- すごく楽しかった（21名）
- うまくできた（8名）
- 震災に負けないで頑張ろうと思った（11名）
- 描いた10年後の宮戸になるように頑張ろうと思った（11名）
- その他（2名）

(3) 2学期に親子で制作した「親子創作文字」についての感想（複数選択）

- すごく楽しかった（21名）
- うまくできた（9名）
- 自分が思っている10年後の宮戸について分かってもらって、うれしかった（5名）
- 震災に負けないで頑張ろうと思った（9名）
- 描いた10年後の宮戸になるように頑張ろうと思った（6名）
- その他（2名）

(4) 2学期に取り組んだ「各自の絵を一つの壁画にしたり、宮戸にちなんだ額縁の制作」についての感想（複数選択）

- すごく楽しい（22名）
- うまくできている（14名）
- 震災に負けないで頑張ろうと思う（5名）
- 描いた10年後の宮戸になるように頑張ろうと思う（8名）
- その他（2名）

第1期の活動である題材「10年後の宮戸島」が完成したとき、21名の児童が「すごく楽しかった」と回答している。その理由で最も多かったのは、「絵の具以外のたくさんの材料を選んで、描いたことが楽しかった」であり、半数の12名に及んだ。さらに「10年後の宮戸を想像するのが楽しかった」と回答している児童が3名いた。描くことによってセラピエ的な効果が生まれた、とも受け取ることができる。教職員一同、「東松島（宮戸）復興プロジェクト

・チルドレン」を企画・立案し実践して、本当によかったと感じている。

また題材「震災に負けないで、頑張ろうと思った」と回答した11名の児童のうち、その理由として多かったのは、「家が流されたり、がれきで一杯になったりしたけど、描いていくうちに頑張ろうと思った」で、6名にのぼる。

第2期の活動である「各自の絵を一つの壁画にしたり、宮戸にちなんだ額縁の制作」について「すごく楽しい」を5名が選択している。そのうち4名が、「みんなの絵を一つの絵にしていけるのが楽しいから」と回答している。

各自の絵を児童自ら同じテーマ毎でグループをつくり、話し合っ一つ一つの絵に仕上げていく活動は、子どもたち自身が宮戸島を復興させていく、姿そのものでもあったと感じた。

## 6. おわりに

平成22年3月に策定した宮城県教育振興基本計画では、重点的な取組の一つとして「志教育」が掲げられ、各校ごとに特色のある「志教育」が展開されている。そこでは、自己と社会との関わりを意識させ、社会の中で自分ができることや果たすべき役割とは一体何か、を考えさせる。その実現のためにはどのような取組みが必要かを、深く考えさせる実践が試みられている。

震災直後、本校では10年後の宮戸島についてイメージをめぐらせる造形活動や、思いを醸成する親子



(図22) 全校児童でつくりあげた壁画「10年後の宮戸島」

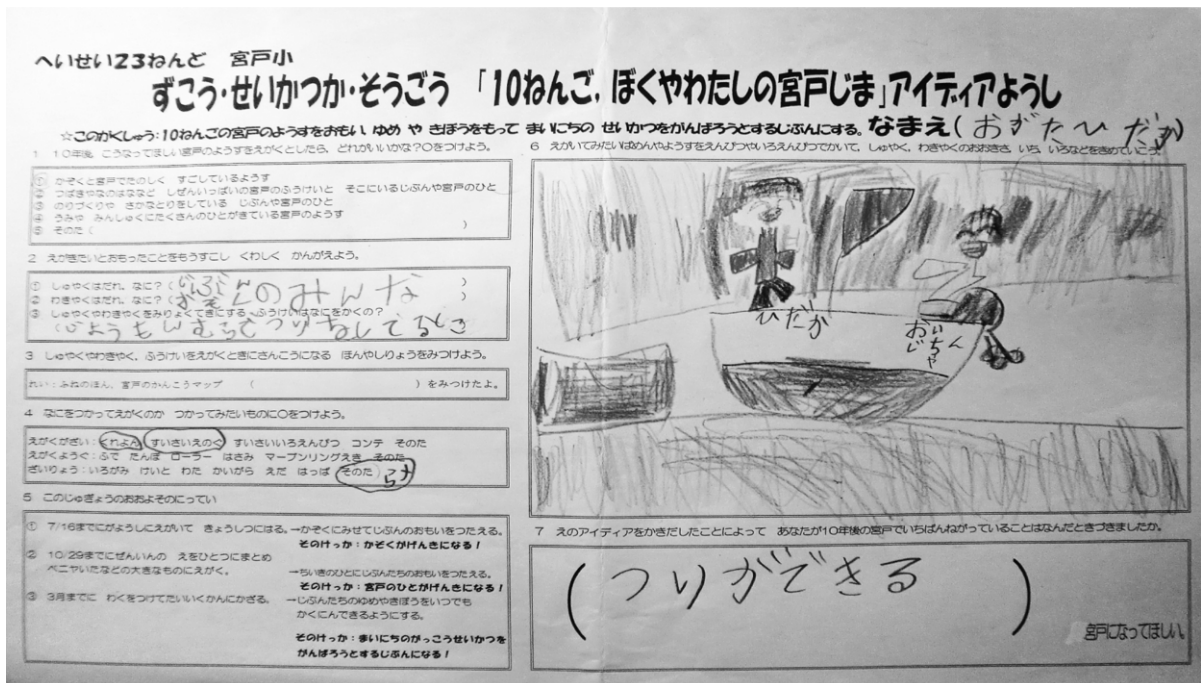
創作活動を行って、将来への夢や希望を抱かせた。現在、宮戸小ではそれらを実現するために児童ができる、奉仕活動を行っている。それは浜清掃や、浜に咲いていたハマヒルガオ等の再生である。今後も続くプロジェクトCの取組みから、児童の夢や希望が高い「志」となって実を結び、10年後に震災前以上の宮戸をつくり出す、原動力になりうることを教職員一同、念願している。

註

1) 全児童29名が構想カードに書き込んだ、「10年後の宮戸島」に対する夢や希望を分類したところ、以下のように大きく6つに分かれることが判明した。この分類法は、第3期活動である壁画づくりに向けた児童主体による構想を、練りあげるのに効率的だった。

- ①「森や鳥などの自然にかこまれた宮戸（椿、昆虫、カモメ）」人数：6人
- ②「自然の中で笑顔あふれている人たちがいる宮戸（森林、大高森頂上、そこで笑顔になっている人の姿）」人数：5人
- ③「魚がいっぱいいて釣りがたくさんできる宮戸」人数：6人
- ④「きれいな海の宮戸」人数：5人
- ⑤「きれいな夕日の宮戸」人数：2人
- ⑥「家族やお客さんが笑顔の宮戸（民宿、のり工場、家族団欒の家等が見える街並み）」人数：5人

2) 全児童29名が描いた「10年後の宮戸島」の絵は紙数の制限で省略。名札にそれぞれの児童が願っている「10年後の宮戸島」に対する夢や希望が書かれている。



(図23) 児童の夢や希望が書かれた構想カード (右下の枠に書かれた文字に、子どもたちの夢や希望が表現されている。)